

「待望の大谷さんの“台風”が出ましたね。読みましたか。」

「一読しました。あまり大きな期待を持ちすぎたせいか、旧版の7割近くが踏襲されているので、少し見当りがいをしたような気がしました。」

「私は病気でねている間に旧版とかなりくわしく対照してみたのですが色々の事がわかって面白かった。」

「旧版は確か昭和15年でしたね。」

「そうです。当時大へんの名著といわれた“暴風雨”が出てから今年で丁度15年です。頁数は旧版の158頁から新版の202頁にふえています。題名は内容から言って“暴風雨”の方がよかったような気がしますね。」

「岩波の商業政策ではないですか。」

「書き出しが新版と旧版で全く逆の事が書いてあるので歴史的に言って大へん興味があります。旧版は寺田寅彦例の“災害は忘れた頃に来る。”から始まっていますが新版は“天災は忘れる前に来る。”から書き始められています。」

「一体どうしてそうなったのですか。」

「くわしくは本文を読めばわかりますが、要するに災害は人間社会の問題だから、社会が変れば災害の性質もかわるといことです。それに本文に引用された齊藤氏の研究で明らかのように災害の増減には確かに永年変化があるようです。」

「“気象の災害対策は如何にあるべきか”には渡辺次雄氏の新しい論文が引用されていますが、旧版ではここはどうなっていますか。」

「旧版にはこれに相当する節はないようです。短い一節に具体策まで詳論はできないでしょうが、この節では気象災害の順序が述べられただけで、あとは渡辺氏の論文のかなり誤解をうけそうな引用のし方で結んで

おられるのは少し不満です。渡辺氏の論文は災害の問題を体系的にまともにとりあげた先駆的のもので、その意味では高く評価すべきですが、しかし不明瞭の所の多い論文です。渡辺氏はこの論文を学会でよまれた時に後の久米さんとの討論で具体策として防災教育が最も大切であることを述べられたのですが、論文にはこの点のはつきりうち出されていません。もしこの点が論文で強調されていたら大谷さんの引用もかわっていたかもしれません。」

「旧版と変わったところはどんな所ですか」

「逆にかわらない所から言いますと全体で4章あるうち第2章と第4章は単位や風級や警報の種類が変わつたくらいで、ほとんど同じものです。旧版の134頁、新版の176頁にある冬のせん風のモデル図をくらべてみると大へん面白い。現在のモデルが完全なものだとは思わないが、こんな簡単な図でも歴史的な発展が感ぜられます。」

「第1章は書き出しが旧版と全くちがっていることは前に言いました。2, 3の項目は旧版のまゝですが、残りの4節ばかりは新しいもの、ただし“改元と台風”は“天気予報三十年”に、“野中兼山の偉業”は弘文堂版“台風”に掲載されたものの一部です。」

「大部増補されているのは第3章の“台風の話”です。増補された内容は現象的に明らかにされた点の記述が大部分です。飛行機や定期観測船による台風観測、ゾンデやレーダーの利用、シンプソン博士の台風眼の観測など新に書き加えられています。予報上書き加えられたのは“台風の進路は何でできるか”の所でストイエルングの考が簡単にのべられただけで数値予報はとり上げられていないようです。」

「そうすると最も新しい台風の本とは言えないわけですね。」

「そう簡単に言えないと思います。リールの熱帯低気圧の本は確かに良い本ですが、誰もがあのようによく必要はありません。リールの本だって後まで残るのは事実だけです。仮説はどんどん変つてゆきます。体系的にまとめた本ばかりが必ずしも良いとはいえません。読む人に多くの有益な示さを与えることの出来る本が良い本なので体系的にすっきりしていれば確に頭には入りやすいかもしれませんが、大切な点が網の目からもれる恐れが多分にあります。それ以外に考えようがないというようにおしつけられる恐れも出てきます。逆に雑然とした感じの本でも事実が注意深くのべてあれば必ずや深い示さを与える筈であって、大谷さんの本の場合は文章に無駄がないから雑然といった感じは全くなく、すっきりしていて、体系的ではないが示さ的であると思います。」

「この本の影響はどんなものでしょうか。」

「旧版“暴風雨”が出版された時はかなり広くよまれ、私なども雑文を書いたり、講演をたのまれた時には種本にしたものです。ですから台風知識の普及に与えた影響は実ははかり知れぬものがあります。旧版との比較ばかりして、新版にうけつがれた旧版の長所はあまり活しませんでしたが、今回の“台風の話”も興味深いよみやすい本ですから、おそらく広く普及するものと思われま。誰もが同じ本を書く必要はありません。その著者でなければ書けないことの書いてある個性の強い書物こそ最も興味の深いものと言えましよう」

(K. F)

編集後記

「台風のこない年は建設大臣が非常にラクである。」と新聞にてていたが、気象関係者いや国民全部がありがたい。一つこの秋に際して、全国から“天気”に投稿をお願いしたい。(吉野)